

3・11の大震災以来、首都圏で直下型の大地震が発生するとの予想が現実味を帯びてきた。東京大学の地震研究所では、四年以内にM7級の首都直下型地震の起きる確率は七十%と発表し、後日この値が五十%に修正された。

我々の地球が誕生してから四十億年以上を経過し、その間何度も地殻の大変動に見舞われた。七十%であれ、五十%であれ、大災害は起るときには起る。その正確な時期を科学の力で予想しようというのは土台無理な話ではないのか。

にもかかわらず、大災害を想定した防災の論議が喧しい。私の住むマンションでも、ご多分にもれず各棟の階段ごとに防災班なるものが組織され、私の班では、あろうことか私が班長に仕立て上げられた。

災害時の備品リストや安全確認のルールが作られ、先日は地元の消防署までが参加して大規模な防災訓練が行われた。『備えあれば憂いなし』で、可能な限り災害に備えることは必要だろう。だが、それには限度がある。

六千五百万年前には、直径10kmもある大隕石が地球に衝突した。この時は地球全体が大変動が起り、恐竜が全滅したといわれる。それほどでなくても、仮に大地震でマンションの建物全体が倒壊したような場合には、いくら備えがあつても殆ど役に立たないだろう。阪神大震災では信じられない光景を目の当たりにし、大自然の底知れない威力の前には人間の浅知恵など無力に等しいことを実感した。

我が家での防災対策は極めて限られたものだ。懐中電灯、乾電池、ポータブルラジオ、それに水のペットボトルが少々。防災班の班長としては心細い限りだが、そもそも万全の備えなど不可能に近いと考える。

日本列島は古くから、地震、津波、台風などの自然災害に遭遇してきた。その度に、我々の祖先は嘆き、悲しみ、それでも復興に向けて全力を注いできた。彼らの心の底にあったのは、自然に対する憤りではなく、強大な自然の力を素直に



阪神大震災で倒壊した神戸の実家 ↑

実家近くの阪急神戸線（朝日新聞） ↓



認める、畏怖と諦めの心情ではなかったのか。天災の犠牲者には鎮魂の礼を尽くし、残された人たちが復興に取り組む。我々の祖先はそのようにして日本を支えてきたのだ。

拓殖大学の総長、渡辺利夫氏はこれを「しなやかな諦観」と呼び、かつて産経新聞の「正論」の中で次のように述べておられた。

「合理的思考に則って防災のありようを徹底的に追究することが重要でないわけではない。しかし、防ぎようもない厄事がこの世の中には存在するのだという、しなやかな諦観の構えを私もはまたねばならない。」

「しなやかな諦観」の心情は日本人のDNAに深く刻まれているはずだ。だとすれば、災害に対して過剰なまでに備えることにどれほどの意味があるだろうか。

防災班長としては怠慢の誇りを免れないことを覚悟の上で「しなやかな諦観」のもつ意味を強調しておきたい。

（了）

〔二〇一二年二月記〕

原稿用紙約三・五枚

課題「我が家の防災」

（ゴマすりではありません）